

木の話 (最終話)

萌芽する樹

立っている樹を切った後の切り株や、切り出した丸太から新しい芽が出ることを萌芽といいますが、大抵の広葉樹は萌芽しますが、ほとんどの針葉樹は萌芽しません。

古来より岩手県は『木炭王国』と呼ばれ、その中でも下閉伊郡は特に製炭が盛んに行われてきました。

檜(なら)を主体とする広葉樹の山林の沢口付近に粘土と赤土を使って炭窯(すみがま)を築き、沢に沿った斜面に立っている木炭に適した広葉樹を伐採し、窯に入れる長さに切って窯まで運びます。窯の中に奥から順



イチヨウの丸太からの萌芽

に入り口まで木を積んだら火を焚(た)き付けて、入り口に粘土で壁を築いて、窓の大きさを空気(酸素)の量を加減して木を炭化させて木炭を製造します。

このように製炭用に切った広葉樹の切り株から

は萌芽し、地面に落ちた実から芽が出て、人間が手を加えなくても再び広葉樹の森になっていきます。

隣の沢、また隣の沢と炭窯を移しながら二十五年後には再び元の場所に炭窯を築き、樹を伐採して木炭を製造して家族の生活を維持するという、まさに『地球に優しい』自然の循環の中で人間の生活が営まれてきました。このように石油に頼らない時代が続いていれば『地球温暖化』『大気汚染』などの問題は起こらず、町の人口が減少することもなかったでしょう。

北緯四十度付近に位置する町の広葉樹は



枯れて腐った樹の根元から出た萌芽の成長(宇霊羅神社付近)

最も種類が豊富で、樹が生きている間、毎年いろいろな花から蜂蜜(はちみつ)が採れ、実がなり、多様な動物を養います。また、林間にはランをはじめいろいろな草花や山菜、そして各種のキノコ類も育んでくれます。動植物の生態系を保ち、人間の山村生活を豊かにするためにも広葉樹を見直したいものです。

木工家 工藤宏太

(無断転載はご遠慮ください)